

二つの家族の物語

ストーリー

今回の遠野物語ファンタジーに親子で参加した二つの家族。家族のきずなを深めた、それぞれの親子の姿を追った。



たかし
菅原卓さん(39歳)、めぐみさん(33歳)、
めたく
寛君(3つ)、みのりちゃん(6つ)、まこと
信君(4カ月)
＝松崎町＝

「いつか家族みんなで 演奏できたらいいね」

昨年3月、卓さんが遠野病院の医師として着任するため、富山県から転入した菅原さん家族。見るのも参加するのも初めてのファンタジーに、卓さんと長女のみのもりちゃんは音楽スタッフの一員として参加した。

小学4年生でトランペットを始めて以来、ずっと音楽を続けている卓さん。遠野でも早速、市民バンド「ニユーリパティーズ」に加入し、週に一度の演奏を楽しんでいる。歌が大好きな長女のみのもりちゃんは少年少女合唱隊で音楽を楽しむ。

音楽スタッフが陣取る舞台下のオーケストラピットで、初めてのファンタジーを間近で感じた卓さん。「自分の演奏の出だしを忘れてしまうほど、劇に引き込まれました。たった3回の公演のためだけに曲が作られていることも、市民の舞台とは思えない素晴らしいさを感じました」と感激の様子。

客席から見守った妻のめぐみさんは「素人とは思えない迫真の演技。想像していた以上の素晴らしい舞台に、とても感動しました」と話す。

実はみのりちゃん、本番二日前の総稽いこでの迫力の演技に驚き、残念ながら本番には参加することができなかった。春からは1年生。「来年こそはお父さんと一緒に出たいです」と笑顔で話す。その隣で、長男の寛君はお父さんのトランペットを吹いて楽しむ。寛君と一緒に出演する日もそう遠くないようだ。

現在は11月に産まれたばかりの二男・信君の子育てに忙しいめぐみさんも、大学時代は交響楽団のメンバーとして打楽器で活躍。「いつかは家族みんなで演奏したいね」とほほ笑む。

これからも続くファンタジーとともに、菅原さん親子の参加も楽しみだ。

Story of Sugawara family

Story of Ito family

コンプリオ銀河混声合唱団の一員として、生演奏のコーラスを担当した八重子さんは5回目の参加。3月で高校を卒業する二男の達矢君は、主人公のトトに片思いする梅蔵(うめぞう)役で初めに参加した。

達矢君の出演のきっかけはお母さん。「地元にある、こんなに素晴らしい舞台。達矢にも出てもらいたいと、ずっと思っていたんです。無理を承知で誘ってみました」と八重子さん。すでに進路が決まっていた達矢君。将来に向けもっと多くの人と交流をしたいと思っていた矢先の出来事に、「せっかくなのでチャンス。挑戦してみよう」と出演を決意した。

八重子さんは、みやもりホールで週に一度の練習。達矢君は11月のキャスト顔合わせから毎日のように列車で市民センターへ通い、練習に励んだ。達矢君にとってのファンタジーは、誰一人知り合いない世界。「最初は話し掛ける相手もいなくて不安だらけでした」と打ち明ける。演技では、日常聞きなれない「遠野弁」の独特のイントネーションに苦労した。ほかのキャストのせりふに耳を傾け、時には積極的に質問をして自分のものにした。



えこ
伊藤八重子さん(52歳)、たつや
達矢君(黒沢尻工高3年)
＝宮守町宮守＝

忘れられない充実の日々。 息子の成長を実感。

取材を終えて

遠野の里に春を呼ぶ「遠野物語ファンタジー」。35回目となる今年の舞台も、大盛況で終幕した。会場となった市民センター大ホールはキャスト、スタッフ、そして観客までもが一体となり、ファンタジーという名のハーモニーを響かせた。地域や年代、職域を越えた住民力の結集は、これまで不可能といわれてきた舞台も見事に成功させ、遠野のまちづくりの力を全国に発信した。

遠野の民話や昔話を題材にした舞台からは、郷土の伝説や歴史を知ること、郷土愛をはぐくんできた。すべて市民の手で作られるファンタジーの舞台裏では、最高の舞台を目指し子どもからお年寄りまで幅広い年代が集い、地域や家族の絆を深めてきた。

『遠野物語』発刊100周年を迎える今年。市内各地域では記念の年を盛り上げる、市民の手によるさまざまな取り組みが進んでいる。先人から受け継いだ貴重な文化や遺産を後世へと伝えるとともに、遠野にしかない文化・「新たな遠野物語」の創造・発展に、今こそ地域の力を結集しよう。

「ファンタジー」という名の「ハーモニー」完